第三中学校区　施設分離型小中一貫教育に関する研究

第三中学校　　城東小学校
浜田小学校　上大野小学校

めざす児童生徒像

よく学び　　助け合いながら　　たくましく成長する　　児童生徒の育成

研究主題

児童生徒，教職員の交流を図りながら，心身ともに健全な「共に学び，共に伸びる誇り高き三中学区の児童生徒の育成」をめざして

1　主題設定の理由

第三中学校区では，教職員間の交流を図りながら協働で，第三中学区共通の「学習のきまり」をつくったり，4校の教職員が集う「夏季合同研修会」を開催したりするなど，以前から小中連携を推進してきた。学力向上に関しては，小中教職員が全体で顔を合わせ，学び合う機会を増やし，情報交換会を開催するなど，9年間における児童生徒の発達や学びの連続性について，小中職員が互いに理解し合う場を多くするように努めてきた。また，家庭学習やノート指導法の具体的な取組について，情報交換をし学力の向上にも努めてきた。児童生徒間の交流や地域との交流に関しては，部活動体験や地域の祭りでの共同活動等により，児童生徒間の親近感を深めるよう努めてきた。平成 28 年度に，水戸市教育委員会から 3 年間の指定を受け，組織づくりを重点課題としてコーディネーター会議で話し合い,体制づくりに努めた。また,小中全ての教職員が 9 年間の教育計画を意識することで，小中学校の連携が深まり，第三中学校区の児童生徒を，全職員で育てようとする土壌ができれば，「共に学び，共に伸びる」児童生徒が育成できるのではないかと考え，本主題の中心にこの言葉を置いた。

2　研究のねらい

○　各教科の学習において，児童生徒の基礎的・基本的な知識と技能の習得を高めることを目標とした合同研修会や相互授業参観等を行うことにより，「確かな学力」を身に付けた児童生徒の育成に努める。

○　互いの学校のよさを知ることと，地域の特性や資源を調査・発掘することを通して，児童生徒間や地域との交流を深め，「豊かな人間性」を備えた児童生徒の育成を図る。

○　学校行事や集会活動，部活動等において，集団行動における規律を意識した特色ある活動を展開することにより，「健康な身体」をもつ児童生徒の育成に努める。

3　具体的な取組内容

（1）3年間の研究推進計画

3年間の研究到達計画

	知る（実態把握）	広げる（研究実践）	深める（実践の一般化）
	1年目	**2年目**	**3年目**
	組織づくり・教職員交流 組織の立案，チーム別研修，報告書の作成	**教科間，児童生徒交流** 組織の充実，児童生徒間の交流促進，教職員交流促進，実践事例集の作成，報告書の作成	**学校間・地域間交流** 組織の充実，児童生徒・教職員の交流活性化，実践事例集の作成，３地域合同行事の開催（焼き物等），報告書の作成

（2）これまでの研究を振り返って

1年目は「知る」をキーワードとし実態把握に努め，4校が協力し三中学校区の児童生徒の

現状について共通理解することができた。その上で，めざす児童生徒像に向かって何ができるかを考えた。

2年目は「広げる」をキーワードとして，「三中学校区での小中一貫教育の可能性を広げたい」との思いから，様々な活動の研究実践に努めた。その結果，次のような成果と課題が見られた。

ア　成果

○　小中一貫教育の活動を「広げる」ことができた。

○　児童生徒にこれまでに見られなった姿が見られた。

○　教職員の交流が増え，活発になった。

イ　課題

○　学校が隣接しているわけではないので，児童生徒の活動を取り入れることで，各校の教育活動への負担や教職員への負担が増えた。

○　教師の授業力向上や資質向上を目的とするならば，計画を見直す必要があるのではないか。

○　現在の実践を今後も引き続き実践していくことは難しいのではないか。

ウ　持続可能な取組に向けて

これまでの成果と課題から，3年目の研究に向かう上で，継続性のある小中一貫教育とするためには「持続可能な取組」をキーワードとして，これまでの実践を整理，改善していく必要があると考え，各チームで次のようなことを念頭に，実践内容の精選を行った。

○　持続可能な取組とは

・教職員が変わっても実践できる。

・各校の教育活動に影響が少ない。

・取り組んでいる者への負担が少ない。または負担感が少ない。

・「効果」と取組にかかる「労力や時間」のバランスがよい。

・児童生徒，教職員，参加者が楽しめる。

(3)　30 年度　各チームの取組

◎　知のチーム

ア　テーマ　「自ら学び自分の考えを表現し，互いに深め合う児童生徒の育成」

イ　3年次の取組の実際

知のチームでは，3(2)ウの「持続可能な取組」を受け，昨年度までの「英会話研究部」と合同で次のような3チームを編成し研究を進めた。

(ア)　知のチーム①②の取組

本研究部は，学力定着状況調査の分析等から，共通の課題を見出し，授業改善プランの立案や研修計画を行うことを目的として編成した。主に各学校の「国語・算数数学・理科・社会・英語の教科主任」が所属している。

○　学習定着状況調査のプレテストの見直しを行い，プレテストを実施した。

○　調査結果を受けて，中学校区での分析を行った。

○　調査結果の課題を基に，授業改善プランの立案を行った。

○　今年度末には，授業改善プランの実施状況の把握とそれに伴った児童生徒の実態調査を行う予定である。

(イ)　知のチーム③の取組

本研究部は，主に各学校の「音楽・技術家庭・図工美術」の教科主任が中心となり，教員の授業力向上を目指した研修計画を立案し，実施する目的として研究を進めた。

○　夏季研修計画（実技研修会）を実施するための教師の授業に対する意識調査

○　夏季研修計画（実技研修会）の立案と実施

○　夏季研修計画（実技研修会）の反省と今後の研修についての立案

◎ 徳のチーム

ア テーマ 「共に助け合う児童生徒の育成」

イ 3年次の取組の実際

(ア) 道徳授業研究部

研究部では，これまでの取組の課題として，「新学習指導要領の実施に向けた道徳の授業実践についての小中合同研修の必要性」が挙げられた。そこで，今年度は以下のような取組を計画，実践してきた。

○ 三中学校区の小中4校が同じ資料「泣いた赤鬼」で授業を行った。

○ 夏季全体研修で，講師を招き，資料「泣いた赤鬼」を使った教師対象の模擬授業を行った。

○ 本研究部で，発達段階ごとのねらいを検討し，夏季全体研修を参考に基本となる授業流れを作成し提示した。

○ 各校の計画訪問で，道徳授業を実施し，相互参観を行った。また，各校（各学級）での取組をそれぞれに伝達することで授業改善に生かすことができた。

(イ) 道徳実践部

これまで取り組んできた「小中一斉あいさつ運動」や「小中合同清潔なまちづくり運動」は，児童生徒にとって効果的な活動であった。しかし，児童生徒や教職員にとって負担が大きいという課題があった。そこで，持続可能な方法を模索した結果，次のように取り組んだ。

○ 「小中一斉あいさつ運動」「小中合同清潔なまちづくり運動」を共に年1回とし，月曜日5校時に実施した。

○ 「小中一斉あいさつ運動」への中学生の参加は希望制とした。また，「小中合同清潔なまちづくり運動」は各校で学年を選び，それぞれの母校で実施した。また，保護者ボランティアを募ることで，児童生徒の安全な活動に配慮した。

○ 各行事の終了後に，児童生徒の活動に関する感想から効果の確認をし，来年度の取組方法の参考とする。

◎ 体のチーム

ア テーマ 「生活習慣を整え，体力の向上を図ることができる持続可能な小中連携の在り方」

イ 3年次の取組の実際

(ア) 体力研究部

○ 今年度の目標から，健康教育部と連携して，体力の向上を図ることができる持続可能な取組を明らかにしようと，実践した。

○ サーキットトレーニングの学校ごとの内容の確認と実施状況の報告に加え，場の設定の工夫や共通種目（ジャンプ系）の設定を行い，学校の実態に合わせて実施を継続することができた。

○ 実施3年目となる，9年間体力テストカードを記入し，体力の推移を把握した上で振り返りを行った。また，体力テスト結果を体つくり運動と連携させて，自分の体力状況を意識した運動の実施へとつなげた。新入学予定者の部活動体験を継続し，同じ小学校だった先輩の成長した姿を感じることで，運動や健康に対しての意識を高め，中学校への希望や目標をもって進学できるような機会とした。

○ 9年間を見通して，段階的な体力向上のための目標設定を行った。（陸上・水泳・器械運動の学年ごとの共通目標）

○ 体力テストランキングを作成し，各学校で掲示を行った。体力向上の意識を高めるため，いくつかの種目で再測定を行った。

(イ) 健康教育部

児童生徒の望ましい生活習慣の確立に向け，学校の実情に合わせてマイライフカードを定期的に実施した。また，集計結果を公表し，保健集会や学級での啓発活動に活かす取

組を行った。

（4） 事務部

ア テーマ 『「共に学び 共に伸びる 誇り高き 三中学区の児童生徒の育成」をサポートする学校事務の在り方』

イ 3年次の取組の実際

本研究部では，次の3つの視点で小中一貫教育をサポートする学校事務に取り組んだ。

（ア） 教職員へのサポート

○ 知・徳・体・英会話研究部の各チームに，各チームでの活動に必要な物品について「小中一貫教育に係る購入希望物品等調査表」で希望調査を行い実技研修や小中合同体験活動において予算の有効活用を図った。

○ 「三中学区小中一貫教育チーム別研修会事務連絡票」を作成し，チーム別研修会を実施する際に出張文書の代わりとして活用することで，行事予定表への記録や旅費請求漏れを防止する等，教務主任の業務負担軽減や事務職員の正確な事務処理につながった。

（イ） 児童生徒へのサポート

○ 小中学校の学びの連続性を重視した学習指導につなげるため，2年次に作成した「第三中学校小中一貫教育に係る統一教材・備品一覧」から購入を進め，児童生徒が小中一貫して同一の教材（メーカー・機種等）を使用できるよう整備に努めた。

（ウ） 保護者へのサポート

○ 2年次に引き続き，学校徴収金の口座登録情報を中学校へ引き継ぐことができるか金融機関と協議し，再登録の保護者の負担軽減及び事務の効率化を図るため検討を行った。

4 研究の成果と課題

（1） 成果

○ 教職員の交流がさらに活発になった。また，新たな交流が生まれたことで，ボトムアップ型の研修の実施につながった。

○ 教科ごとの分析や，指導案の立案や教材の作成など，協働の流れが強くなった。

○ 小中一貫教育がより身近なものになり，教職員が自分事として捉える機会が増えた。

（2） 課題

○ 第三中学校区における，各教科・領域の9年間の育ちを明確にする。

○ 領域を起点とした共通課題に取り組むことで，さらに教職員同士の結び付きを確かなものにしたい。